上野彦馬とその時代

姫野順一

⑥ 海を渡った日本の女性像

幕末の風俗を写し取る

安政6（1859）年の開港後、日本を訪れた外国人が故国に持ち帰った写真も多い。

オランダの一等海軍士官ウィレム・アーノルダス・コックは、元治元年5月17日（1864年6月20日）に海軍軍艦の外輪船アムステルダム号で長崎を訪問し、上野彦馬撮影局で26枚の写真を買い求めた。第2次下関戦争（1864年9月）に出撃する直前のことである。横浜の下岡蓮杖による写真などと合わせ50枚が革製アルバム（写真①）に収録され、ライデン大学図書館の写真資料室に収蔵されている。

▼庶民

アルバムにはオランダ語で「このアルバムは1864年6月20日に長崎で購入した。上野彦馬、オノサさん、ミドリさんなど多くの友人のポートレートとその他のものを収載する」と書き込まれている（写真②）。サイズは全て名刺大であり、彦馬の写真機は小型だったことが分かる。

彦馬の撮影局の写真には、目次に次のようなタイトルが付されている。

4、ミドリさん▽6、オノサさん▽7、ウエノヒコマ▽8、タマサさん▽9、軍装の若い武士▽10、タマサさん▽12、ムスメのカサさん▽14、三人のムスメたち　茶店のムスメ▽17、ナガサキ▽18、衣装を着けた婦人▽22、歌う日本人▽23、礼装の武士あるいは役人か▽24、ミドリさん▽25、弓の射手▽26、コヅカイのムスメ▽27、二姉妹と兄弟▽28、歌手の少女▽30、若いムスメ▽34、ムスメとコヅカイたち▽35、八人の役人たち▽36、薩摩の若殿▽39、弓の射手▽40、母とムスメ▽42、母と二人ムスメ▽48、女性のコヅカイ▽50、ナガサキの眺望

この中にはイギリス人写真家フェリーチェ・ベアトが彦馬のスタジオで撮った写真や、侍、弓の射手、風景なども含まれているが、ほとんどは庶民の写真、中でも若い女性と子どもを写したものである。

当時、外国人男性は日本の若い女性を「moesmei（むすめ）」と呼んでいた。女性の写真が多いのはコックの好みとも思われるが、彦馬の手元には姉や妹の友人、芸者、若い女性、同伴する子どもの写真が販売用にそろっていたことがうかがえる。

▼記録

また、これらの写真は、記録に残りにくい幕末の女性たちの平素の姿を収めているという観点からも興味深い。母親、娘、子ども、奉公人、芸者がそれぞれ身分相応の衣装で、はやりの髪形を結い、かんざし、笄（髪どめ）、履物など装身具を身に着けており、当時の女性の風俗が写し取られているのである。

写真③は、彦馬の妹タマ。桔梗に二引きの上野家の家紋が付いた提灯を持ち、雨装束を着けている。この写真はベアトのポートフォリオ（写真集）にも含まれている。

写真④は、衣装から芸者であることがわかる。横には中国から輸入されたと思われる紫檀の香炉台に、彫金が施された香炉が置かれ、さらに金属製と思われる造花が挿されている。これは彦馬の父、俊之丞の作品のように思われる。

写真⑤の「オノサさん」はタマの友人であろうか。撮影局のスタジオ（写場）の屋外で撮られたもので、光線を調整する白布の前の椅子に座り、ポーズをとっている。机上の小物は、油でともす輸入ランプとあんどん、書物で、「読書」のシーンを演出している。

写真⑥は「歌う日本人」と題されているが、右の女性が弾く琴の音に合わせて、左の女性が歌っているようである。口を動かしているような写真は当時としては珍しい。シャッタースピードが遅かったからである。香炉と香炉台は写真④と同じものである。

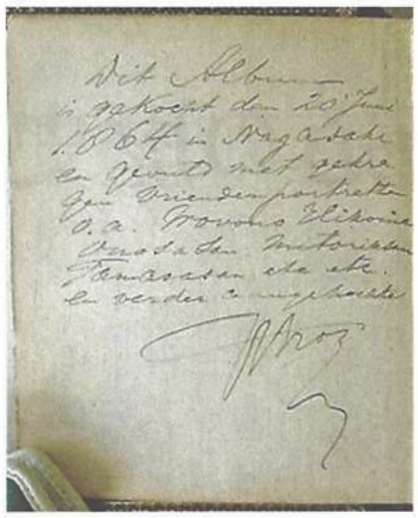
写真⑦は、付されたタイトルから若い女性たちと、奉公人である子どもたちのようである。このスタジオは、床板とそれを支える床柱から、のちに坂本龍馬が撮影された写場と同じことが分かる。

ちなみに写真⑧は、彦馬25歳の写真。上野家の紋付きを羽織り、煙草盆を据えてキセルを手にくつろいでいる。この頃は結婚前で女性にもてたという。

（長崎外国語大学長）

＝偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載＝

①コック・アルバムの表紙（ライデン大学図書館蔵）



②コックによるオランダ語の書き込み

⑦ムスメとコヅカイたち（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－034）

⑥歌う日本人（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－028）

⑤オノサさん（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－006）

④衣装を着けた婦人（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－018）

③タマサさん（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－010）

⑧ウエノヒコマ（同館蔵ＰＫ－Ｆ－60936－043）

長崎新聞 2023（令和5）年2月19日掲載